
徒然雑学草稿（つれづれざつがくそうこう）

東辺木 稔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つれづれごとくそうこう
徒然雑学草稿

【Nコード】

N9797X

【作者名】

東辺木 稔

【あらすじ】

雑草という名の草などないよ。

——昭和天皇 ト部亮吾侍従日記より——

雑学紹介コラム。

雑学という名の学問などありませんが

それを徒然なるままに紹介していいどうかと。

知って得しない。脳の容量を無駄遣い。

パソコンで言うならデフラグしちゃうような内容をキャラが適当に喋るサロン場。

マンガでいう四コマは楽しいけれどもラノベにしたら駄文。

貴重なお時間とエントロピーを無駄にしたい奇特な方向けとなっております。

幅広い雑学をつれづれと語る雑学草稿。

起承転結

四コマ感覚でお楽しみください。

ストーリー、ロマンス、スペクタクル、SF、ファンタジー一切なしの内容となっております。

お暇な時にでもぜひ。

ユリイカ

《普通》とその先輩がある日学校で世間話をした。

「本とか町中でみかけのユリイカってなんて意味です？」

雌同士でくつつくイカ。それは百合イカ。

先輩は常識を問われたようにさも当然と

「英語でわかったという閃きだけど」

頭に電球がピコーン パリィ

というわけか。

「誰が最初に使ったんです」

「湯船に浸かって浮力を発見したおっさんが、全裸で屋外に飛び出してその言葉を何度も叫びながら街を走り回ったという逸話から」

イヤな起源だった。

「そのおっさんの名はアルキメデス。それが科学に対する初期の閃きというわけだ。バレンヌ帝国におけるベアーみたいなものかな」

例えもイヤだった。

悲劇作家

「先輩、何を読んでいるんですか」

彼は目線を移すことなく、

「アイスキュロス。古代ギリシャ三大悲劇作家の一人で源流とも言える人物の作品」

「どのへんが悲劇なんですか」

先輩がいうには彼の作品は90作品の題名が伝承にあるが現存するのはたったの七篇のみだという。

縛られたプロメテウス

ペルシア人

テーバイ攻めの七将

オレスティア三部作

救いを求める女達等

「へえ、どんな人だったんですかねえ」

人類初期の作家に《普通》は古代ギリシャの情景に想いを馳せた。「さあな、だが死に方は知っている。アラビアンナイトに語られるロック鳥のモデルになった鳥がギリシャにいてな。ヒゲワシというんだがそいつは道具を使う珍しい鳥だ」

なにやらそのヒゲワシは亀を足でつかんで空高く舞い上がり、岩に落として甲羅を割って食べるという。

「彼は頭がハゲて岩のようだったから鳥に間違えられ、頭に亀を命中させられて死んだという」

死因 亀 犯人 鳥

死に方も悲劇だった。

悲劇作家（後書き）

アイスキュロスは偉大な人物です。

特に「縛られたプロメテウス」はギリシャ神話はおろかカフカ短編集で取り上げられたり後世への影響力は絶大だといえるでしょう。しかし、彼の死因を知っている人は少ない。

数学者の考え方

電車に乗っている四人が窓の外を眺めた。

その四人は《普通》《数学者》《天文学者》《物理学者》である。
ふと農家の牛が目に入った。

一頭の黒い牛。

《天文学者》はあどけなく。

「へえーおもしろいね。日本の和牛って黒いんだ」

彼女はアメリカ人だった。日本で牛を見るのははじめてらしい。

《物理学者》はこう応じた。

「なにをいうかよん。日本の牛の中には黒いものがあるというだけじゃあねえかよ」

《数学者》は顔を仰ぐと安いつり革に向けて歌うように、

「あら、日本には少なくともひとつの農家が存在し、その農家には少なくとも一頭の牛が含まれ、その牛の少なくとも一方の面は黒いということじゃあないかしら」

《数学者》という人は完全な証明がされない限りどんな主張も認めないらしい。

《普通》の少女はめんどくささにため息をついた。

物質の密度

「広大な大聖堂の中に三粒の砂を置けば、大聖堂の砂粒の密度は、宇宙空間の星の密度よりも高いことになるByジェームズ・ジーンズ」

《天文学》少女との会話中、天文学的な名言をいわれた《普通》の少女はそんなはずないと思った。

そこで科学棟の教諭である明石教諭にたずねた。

彼はなんでも知っている科学棟の主任だ。白衣の似合う若い男性でもある。

「宇宙の物質の密度は、タテ、ヨコ、高さがそれぞれ三十キロのビルに、一粒の砂があるのと大差ないから合ってるよ」

宇宙ひれえな。

マジでそう思う《普通》であつた。

地動説

「ガリレオさんが地動説を唱えるまで誰も地球が周っているなんておもわなかったのかな」

そのつばやきに《天文学者》は嬉々としてある人物を紹介した。ギリシャの天文学者アリストアルコス

紀元前290年頃、彼は太陽は太陽系の中心であると主張した。誰も相手にしなかったし彼の書物は残っていない。

現存するアルキメデスの本に珍説として紹介されているだけだそうだ。

昔は地動説を唱えるとバカにされたらしい。

今は天動説を唱えるとバカにされる。

「へっへっアリストアルコスのドスゴイところは惑星の動きから太陽系を想定して、恒星が動かないのは、遙かに遠いからと主張した」とよ」

「ふっん、でもそれって誰も引き継がなかったの？」

「んんコペルニクスが1800年後にそれを読んで自著に引用したわよ。でも自分の独創性が薄くなるんであとで消しちゃったの」盗作しちゃったらしい。

それにしても今日の常識は明日の非常識。

わからないものだなあ

なんととはなしに自分の足場をみる《普通》であった。

天文学1

「紀元前453年に太陽は直径一五〇キロほどの、赤熱した岩であるとする説をとえた人もいたよ。ギリシャの哲学者アナクサゴラスっていう」

《天文学者》は普段科学第七棟である天文学棟にこもって宇宙を観測している。

時折、部室から出てくるところで一氣に話をしてくる。

《普通》はこの時になると、決まってボタンを押すだけで相づちを打ってくれる機械を切望した。

「ふーん、それでその人はどうなったの」

「世論をまどわすといわれてアテネから追放された」

世知辛いなあ。

「金星の動きを予測するのは細緻を要するの、でも古代マヤ人は年間十四秒の誤差でその軌道を計算したんだよ」

「でっていう」

スゴイけど「それで？」という感じだった。

「昔の人の話もいいけど、今の宇宙についても語って欲しいかなあ」

↑話題転換。

「今一番期待しているのはブラックホールが崩壊したのを観察することかな、新しい発見の宝庫になるんだけど」

彼女は窓から半身乗り出して、足をパタパタ振る。

「だからいつでも観測データ残せるように準備をして待ってるんだ」
まるで誕生会に呼んだ友達を玄関で待ち受けるように、彼女は空を眺めていた。

明日には空が落ちてくるのではないかと、死ぬまで不安に思っていた男が中国にいたという。

杞憂の語源だが。《天文学者》にとっては逆らしい。

「ブラックホール崩壊しろおお」

《天文学者》はなにやら天に向かって両腕を掲げ、思念波らしきものを送る。

なんとなく楽しそうなのでつられてやってみる。

「崩壊しろ」

やがて、うしろで見ていた《物理学者》《数学者》《生物学者》も参加した。

五人で思い思いに願掛けをする。

それを傍目で見っていた二人。明石教諭と先輩は、呆れ調子で、

「今年は何か大予言のたぐいがあったかな」

「マヤの予言ポル・ヴフにおいては2012年12月21日に世界が終わるとかなんとか」

トルエル

ある日《数学者》は校内の運動棟で決闘の審判を頼まれた。

《鉄棒》《フェンシング》《早撃ち》の三人からである。

何でも下らない言い争いで三人は決闘することになったらしい。

銃で決闘することになったが実弾でなくエアガンで決めることになった。

たまたま近くを通りがかった《数学者》が立ち会いを頼まれたわけだ。

三人が決闘前、的に試し打ちをしたところ。

《鉄棒》は三回に一回標的に当てることができ。

《フェンシング》は三回に二回。

《早撃ち》は百発百中であつた。

公平に決着をつけるために《鉄棒》《フェンシング》《早撃ち》の順に一発ずつ撃つことになった。

《鉄棒》は最初にどちらを撃つと勝つ確率があがるのか。

《数学者》は考えた。

もし弾を《フェンシング》に放ち当てれば、順番を繰り上げられた《早撃ち》によつてもたらされるのは、完全なる敗北である。

なら狙うとしたら消去法で《早撃ち》となる。

《フェンシング》の場合を考えると《早撃ち》は《鉄棒》よりも自分を危険視するはずだ。そのため当然は《早撃ち》^{フェンシング}を優先的に撃つ。

外すと百発百中の《早撃ち》は《フェンシング》を撃ち抜くだろう。

一見この状態だと《鉄棒》は最初に《早撃ち》を狙うことでしか勝ちを拾えないように思える。

だが、もっといい方法がある。

《数学者》は審判に立ちながらそれに気づいたが黙っていた。

もし《数学者》が《鉄棒》だったなら最初の一発を空に向かって撃っただろう。

なぜなら《早撃ち》目がけて撃ち、当たってしまった場合、彼の勝率はガクリと下がる。

それを避けるには《早撃ち》と《フェンシング》を二人で潰し合
いさせればいい。

二巡目にはどうせどちらかが倒れている。

残った方を撃てば良いのである。

三人での決闘の最初の一発を撃つだけでなく、二人による決闘の最初の一発を撃てば良かったのだ。

結果は《早撃ち》の勝ちで終わった。

世の中とは確率通りにはいかない。

トルエル（後書き）

有名なゲーム理論のひとつです。

モンティ・ホール問題

《数学者》は先ほどの決闘に関する考察を誰かにしたかった。ところが彼らの名誉のために喋るわけにはいかない。

そこで気晴らしのため友人である《普通》にまた違った問題を出してみることにした。

「アメリカの有名なゲームショー番組であつたことなんだけど聞いてくれるかしら」

「ゲームショー？ 日本でいうフレ。ドパークみたいなもんですか」
身も蓋もない。

「そんな感じね。その司会者モンティ・ホールの名前から取った問題なんだけど。A、B、C三つのドアがあつて、そのどれかに新車、ヤギ、なにもない、があつて新車のドアを選ぶとそれが貰えるの」
「パジエロ！ パジエロ！ とタワシ！ という感じですね」

彼女の例えはいつも俗っぽくていけない。

《数学者》にはこの友人であり妹のように思える《普通》の少女があまりに無知なのを本気で心配する悪癖があつた。

《普通》は彼女のそんな不安を知るよりもなく、いつもしまりのない顔をしているのだが。

「挑戦者が一つのドアAを選択した後、司会者が残りのドアのうちヤギがいるBドアを開けてヤギを見せる」

「ふんふん、それで」

「司会者モンティは挑戦者に最初に選んだAドアから残っている開けられていないCドアに変更してもいいよというの。そこで、問題。挑戦者はドアを変更するべきかしないべきか」

《普通》は腕組みをして考えはじめた。頭を抱えて耳から蒸気がプシューと吹き出ている。

感覚的に1/3の確率から1/2になったように思える。

だから、変更しようがしまいが確率は同じ $1/2$ のままだと考える。

《普通》の少女なら尚更この考えにはまるだろう。

「うーん。扉を変えます、たぶんそっちのほうが2倍当たると思います」

《数学者》にとっては予想外に彼女は正解を言い当てた。

確かにこれは直感的に確率は変わらないように思える。

だが、新車がもらえる確率はそれによって2倍となるのだ。

つまり、最初に選んだ時のAの正解率（新車）は $1/3$ 。

しかし、残されたCドアの正解率は $2/3$ となる。

一見ヤギを見せることによって分母が減りA、Cともに $1/2$ になったと考えてしまう。

それがこの問題をややこしくさせている原因だ。

最初のAは選んだ時点から実は確率を変化させていないのだ。

残されたふたつのドアに新車がある確率は $2/3$ のままなのである。

そして、その状態でハズレをみせれば、残されたドアに確率が集中する。

つまりAは $1/3$ とBは $2/3$ である。

そのためドアを変更した方が正解率は2倍になるというわけである。

感覚的にわかりやすいのは、ドアの数を増やして考えること、

これがもし100の扉のうち99のドアが行き止まりの壁だったとしよう。

最初に握ったドアノブの先が正解かは $1/100$ である。

すると、それをあける前に答えを知る者が現れて、他の98のドアを開けてしまう。

残されたドアはふたつだが、果たしてそれは $1/2$ だろうか。

答えを知る者が意図的に残したのが $99/100$ の確率で正解と

いうわけだ。

これは米紙を騒がせた問題である。

「どうして、わかったの？」

《数学者》は彼女のフツの考え方というものが理解できなかった。

彼女はあっけらかんと。

「答えを知る人というのは、たぶんイジワルだと思ったんです」

モンティ・ホール問題（後書き）

余談だがIQ228の天才、マリリン・ボス・サバントは新聞のコラム「マリリンに聞く」で「モンティ・ホール問題」について投書を受け、「ドアを変更すると景品は2倍の確率でもらえる」と回答。

一万通の抗議ハガキを受けるという反響を受けたが、後に彼女の正しさは証明された。

ちなみにマリリンはIQの高さギネス保持者である。

平均は100前後。120あれば大体は天才として扱われる。

アインシュタイン博士とホーキング博士のIQは160とされている。

アクション俳優のアーノルド・シュワルツネッガー氏はIQ135。

かなり高い。

百発百中の決闘者

ところで銃による決闘にはこのような逸話もある。

三銃士や巖窟王の作者であるアレクサンドル・デュマ。

彼は友人と激論になり決闘によって決着をつけることになった。

互いに銃の名手なので相打ちの可能性が高かった。

そのため、くじ引きで決め、どちらか一方が自分を撃つという約束である。

デュマはハズレを引いた。

彼は銃を握りしめると自室に籠もった。

誰もそれを引き留めない。

やがて一発の銃声が響いた。

誰もがデュマの死を確信した。

かけつけた仲間達が彼の部屋でみたのは、銃を手に恐れおののくデュマの姿だった。

「信じられない。私という者がこの距離で打ち損じたのだ」

これくらいの凶太さは必要である。

ちなみにロシアの詩人であり小説家のレールモントフは、プーシキンの無意味な決闘での死を悼む誌により世に認められた。その数年後、彼自身はもつとばかげた決闘で死んだ。

「ジャングル・ブック」の作者

1889年に日本経由でサンフランシスコに向かった作家。

「お気の毒ですが、英語の文章がなってませんな。アマチュアじゃあ困るんですよキップリングさん」

彼はこうしてサンフランシスコ新聞をくびになった。

短編を書き上げた時で、のちに高く評価された作品についての評。彼はのちに子供が生まれたときに世話をしてくれた乳母に原稿を渡した。

「お金が必要な時に売るといい。いくらかの値はつくだろう」

何年か経ち彼女はそれを売った。

それは「ジャングル・ブック」の初稿で、年収の何倍分にもなった。

最後の錬金術師にして最初の科学者

錬金術は成功しなかったが、その研究中に、硫酸、硝酸、塩酸を発見した。

近代科学工業では金以上に有益だが、その功績をたたえる人はいない。

「それで、錬金術はどこで失われたんですか《物理学者》さん」

「万有引力を発見したニュートンが最後の錬金術師となった。彼は科学への道を開き最初の科学者となった。皮肉にも彼の発見が錬金術を殺してしまった形になるねん」

「じゃあ、最後の科学者は、最初の何になるんですか」

「……魔法使い……かな？」

21世紀中には全ての科学を統合する「万物理論」が完成するといわれている。科学が定義する世界の法則全てが明らかとなったとき、その発見者は最初の何になるのか。

まだ誰にもわからないことである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9797x/>

徒然雑学草稿（つれづれざつがくそうこう）

2011年10月30日15時08分発行